

せきずい基金 活動報告書

日 時：2011年7月23日（土）～7月25日（月）

場 所：岩手県...盛岡（岩手県被災地障害者支援センター）、陸前高田（ひかみの湯、仮設住宅
宮城県...仙台（宮城県被災地障害者支援センター）

内 容：「被災地支援の現状と今後の課題についての調査」

〈現状の課題〉

①仮設住宅の問題

- ・ 一般の**仮設住宅**を障害者が利用する際、自治体ごとまた居住する地区ごとに対応が違い、全く改修できない物件、改修しても問題ない物件、改修は可とするが原状復帰とする物件など**仮設住宅集落**ごとに違う点。
- ・ **仮設住宅の周辺**は大きな砂利が敷き詰められており、車椅子での移動は困難。アスファルトやスロープを敷き始めたが、まだ石巻市の一部自治体等にとどまっている。
- ・ 障害者用**仮設住宅**は車いす利用者の場合、建物への入り口や部屋内の移動は問題ないが、引き戸が重い点、トイレが向かって縦向きの**為移乗**できない点、風呂場の入口に高い段差があり、車いすのまま入れない点、部屋内部が柔らかい絨毯敷きの**為移動**が困難な点等が大きな問題として感じた。また台所の高さが低く、視覚障害者にとっては使いにくい仕様ではないかと感じた。
- ・ 改修する際、国や自治体からの補助金が皆無な**為被災した障害者が仮設住宅に住むことは困難な状況**にある。

②災害当時の状況と問題点

- ・ 電気が遮断されたと同時に電話等の通信手段が途絶え、TVラジオ等（情報を得られたのは車に搭載のTV・ラジオからのみ）からの津波情報も得られず、各人が判断し行動しなければならぬ状況にあった。
- ・ 避難所に指定された個所が津波の被害にあい、家族がバラバラとなり、どの避難所にいるかを足で周って確認した。いくつか避難先を考慮しておくべきであったとの事。
- ・ 上記からヘルパーは判断を仰げない**為**、各人が判断しなければならぬ状況にあった。調査に協力頂いたヘルパーからは、まず利用者の元に安否確認に赴き、確認後利用者宅を離れ家族を捜しに出かけたとの事。数日後避難所に置かれた衛星電話にて、事業所へ当人及び利用者の安否を報告した。
- ・ 支援センターでは被災した障害者の情報を集めたが、湾岸部の避難所には身体障害者はあまり確認できず、施設、内地及び他県へと移住したと考えられる。
- ・ 夜に地震があった場合、街灯もなく避難することは**厳しかった**とのこと。

③被災後の問題点

- ・ 被災後支援センターから介助者を派遣し、大変喜ばれた。しかし時期を見て撤退させなければならぬが、その交渉が困難となっている。
- ・ 今障害者が施設などに集められているが、地域に戻れたとしてもそのままグループホーム等に集約されないかを懸念している。その理由として自治体がグループホームの運営者を公募していることがあげられる。
- ・ 病院などへの移送が困難。被災以前からも特定業界からの反対があり移送サービスができなかったが、現状も同じ。しかしながら電車もなく、タクシーや車の不足によってさらに**厳しい**

環境になっている。

〈今後の課題〉

東京で震災があった場合、まず心配されるのが火災である。その為以下に留意し、検討していくことが望まれる。

- i) 避難所の候補をいくつか用意し、避難経路に燃える建物や木がないかを事前に確認する。
- ii) 被災した際の本人、ヘルパーや家族の行動マニュアルをある程度検討しておく。（呼吸器利用の人は消防署や病院など非常用電源のある個所をあらかじめ確認しておく）
- iii) 避難後に他県に移住する際の候補地をあらかじめ検討しておく。
- iv) 携帯の電波が失われていると確認できたら電源を切り、時々確認する程度に留める。
- v) 夜の避難を想定し、避難経路と懐中電灯などを用意しておく。
- vi) 宮城被災地障害者支援センターでは、各利用者が事務所から近かった為、事務所が避難所となった。このことから各団体が独自の避難所を模索していく検討も必要。